

ぎふどうぼう

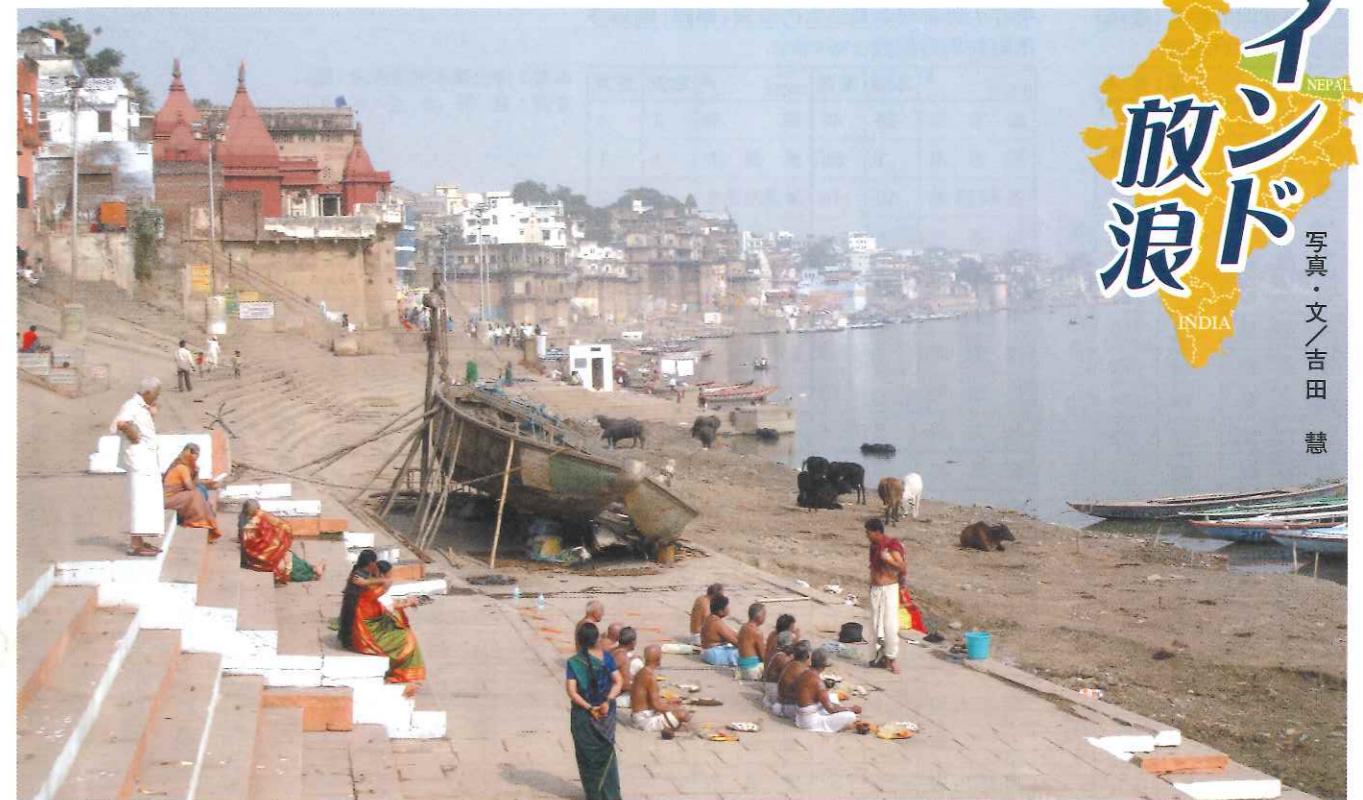
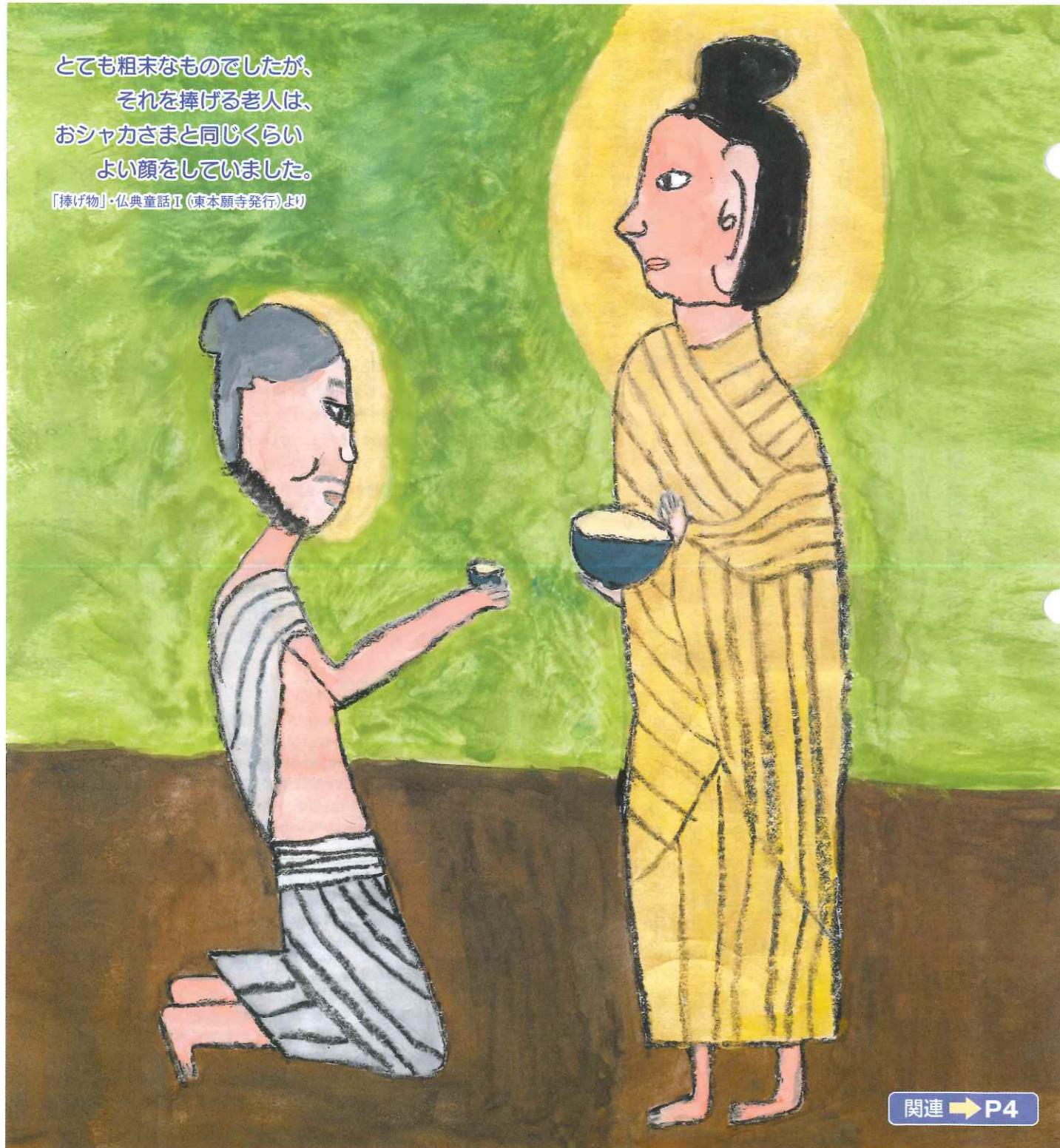
GIFU DOBO

真宗大谷派岐阜教区

2009.07

99

特集 「末法五濁の有情の」(高史明) ●『仏典童話』を訪ねて

シリーズ
真宗の歴史 本願寺東西分立と岐阜本願寺門徒の東西分属 ● インド放浪

インドのガンジス河という河の名を一度は聞かれたことがあります。この河は、ヒンドゥー教徒にとって、聖なる河として、ガンガーと呼ばれています。そして、そのガンガーが悠久と平原を流れるヴァラナシ(ベナレス)という三千年以上の歴史を持つ古都を歩くのは冒険です。なぜならば、狭い路地を堂々と歩くウシの横をすり抜けて行く勇気試しだったり、ゴミや大きな糞や死んだネズミを避ける障害物競争だつたりするからです。時には横たわっている死ぬ直前の人間をも避けて通らなければなりません。さらに停電が頻繁に起きたため、暗闇の中、その迷路をさまよわなければならぬこともあります。

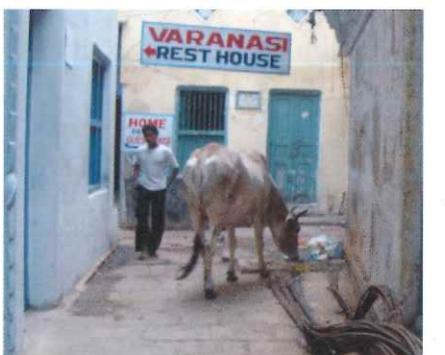
ここでの生活で最も強烈だったのは「死」の近さです。河沿いにある火葬場は二十四時間煙が途絶えることはありません。焼かれた遺灰は、魂と体を清めると信じられているガンガーに流されます。ここで火葬されるために、自分の死が訪れるのを

編集後記

「岐阜同朋」は次号で通巻百号目を迎えます。単なる歴史の通過点になるのか、それとも特別な号になるのか、編集委員一同鋭意検討中ですが、今まで編集に携わってこられた先輩方、ご意見などよろしくお願いします。(松)

じっと待っている老人がたくさんいました。ヒンドゥー教徒にとっての最高の幸福はガンガーで火葬されることだそうです。妊婦や三歳未満の子の死体は、ヒンドゥー教の方から、焼かれることなく、そのまま流れます。その流れてくる水膨れした死体や焼け残った死体に野良犬や鳥が群がる光景はとてもおぞましいものでしたが、その同じ河、それでもすぐ近くで毎日、沐浴、洗濯がされています。子どもたちの遊び場もこの河です。この聖なる河は私から見れば、死体が流れてくるような異常なほど汚い河です。しかし、ここで生活している人には、日々の生活に欠かせない大切な水が流れる河であり、死をも、やさしく呑み込んでくれる大河なのです。

この地では「生」と「死」という、私の日常では対極に思えるものが、この河によって、とても近いものに感じました。



特集 短期集中連載③最終回 末法五濁の有情の

高 史明

底知れぬ謎にむかひてあるごとし
死児のひたひに／またも手をやる
『一握の砂』＝石川啄木。啄木がこの歌を詠んだのは、一九一〇年であった。その啄木の背後には、いかなる黒闇が圧し迫っていたか。その年の五月から六月にかけて、幸徳秋水らが逮捕されていた。いわゆる大逆事件が起きているのである。明治の強権はその翌年、逮捕した幸徳ら二十四名の中の十一名を早々に死刑台に送り、さらにただ一人の女性だった菅野スガをも処刑していた。しかも、その大逆事件とは、冤罪だったのではないか。

一方、この一九一〇年とは、帝国日本による韓国併合の年であった。ここに改めて注目される。大逆事件と韓国併合とは、明治の強権の素顔そのものにほかならなかつたのである。即ち、その顔は日本国内に向かつては、大逆事件という日本人にとつての根本的災厄となり、対外的には朝鮮侵略の業火となつていたのである。

啄木は、この強権の闇のただ中で、幼い死児の顔を見つめていたのだった。その心底には、荒涼とした風が吹き流れていたのではなかない。『一握の砂』には、その彼の心底の孤獨と時代の闇が深く詠み込まれていると言えよう。

参政権を保障していかなかったのだった。啄木の論文は、その帝國憲法の闇を指摘しているのである。婦人の参政権がなかつたということこと——幸徳秋水らの不幸は、まさにこの婦人の不平等の現実とぴたりと対応していたのである。実際、この不平等がその後の戦争の闇の深まりとともに、どれほど多くの女性に涙を流させることになつたか。実際に女性の参政権が確立されたのは、帝國憲法が否定された第二次世界大戦のことだったのだ。

一方、この帝國憲法の下に「併合」された朝鮮人には、いかなる闇が襲い掛かっていたか。併合と言う闇を、「在日朝鮮人」とかかわって、一点に絞つて見よう。併合以前の在日朝鮮人は、決して多くなかつた。ほとんどが留学生や商人らであつて、その数は千人も満たなかつたのではないか。ところが、併合後の五年間には、三千二百人となり、いわゆる満州事変の時期には、いつきに三十九万五百四十三人になるのである。そして、日中戦争の時代には、百万人を越え、さらに日本が敗戦した一九四五年には、実に二百三十六万五千二百六十三人になつていたのだった。

恐ろしい数である。この数字は数字であつて、しかも劫濁そのものを意味していよう。この現代世界こそは、まさに「末法五濁」の奈落そのものである。親鸞聖人のご和讃が

参政権を保障していかなかったのだった。啄木の論文は、その帝國憲法の闇を指摘しているのである。婦人の参政権がなかつたということこと——幸徳秋水らの不幸は、まさにこの婦人の不平等の現実とぴたりと対応していたのである。実際、この不平等がその後の戦争の闇の深まりとともに、どれほど多くの女性に涙を流させることになつたか。実際に女性の参政権が確立されたのは、帝國憲法が否定された第二次世界大戦のことだったのだ。

一方、この帝國憲法の下に「併合」された朝鮮人には、いかなる闇が襲い掛かっていたか。併合と言う闇を、「在日朝鮮人」とかかわって、一点に絞つて見よう。併合以前の在日朝鮮人は、決して多くなかつた。ほとんどが留学生や商人らであつて、その数は千人も満たなかつたのではないか。ところが、併合後の五年間には、三千二百人となり、いわゆる満州事変の時期には、いつきに三十九万五百四十三人になるのである。そして、日中戦争の時代には、百万人を越え、さらに日本が敗戦した一九四五年には、実に二百三十六万五千二百六十三人になつていたのだった。

恐ろしい数である。この数字は数字であつて、しかも劫濁そのものを意味していよう。この現代世界こそは、まさに「末法五濁」の奈落そのものである。親鸞聖人のご和讃が

深く思い返される所以である。

末法五濁の有情の／行証かなわぬとき
なれば／釈迦の遺法ことごとく／
龍宮にいりたまにき＝「正像末和讃」

思えばしかし、石川啄木はこの劫濁の時代を生き抜いたのであつた。何度も死に掛けたのではなかつたか。「大といふ字を百あまり／砂に書き／死ぬことをやめて帰り来れり」という歌もあつた。しかし、石川啄木はその孤独に堪えて、故郷の山を見つめる深い眼差しをも明らかにしていた。

ふるさとの山に向ひて／言ふことなし／
ふるさとの山はありがたきかな

ところで、繁栄を謳歌している現代日本において、この感性はなお生きているであろうか。今日の日本では、一日に八〇人以上の人々が自殺しているのである。その背景として、現代日本の繁栄には深い虚構が横たわっているということはないか。今日の経済危機は、その虚構がもたらしたものであろう。いわゆるバーチャル経済の虚構が、実体経済の根っこをいつきに打ち壊したのである。

ところで、この虚構の闇は、経済状況に見られるだけではないとも考えられる。今日の東アジアには、厳しい緊張が続いている。思えば、戦後すでに六十有余年が過ぎている今日、日本と朝鮮半島の関係はいまなお戦

前の闇を引きずつてゐるのだった。韓国との関係は、良好である。しかし、朝鮮半島北部の北朝鮮との間には、いまなお国交すらないのである。今日の東アジアの根源的不安の根源としては、一九一〇年以来の歴史の歪みが、底知れない奈落となつて横たわつてゐるのではないかと考えられる。

思えば、親鸞聖人はまさに、鎌倉時代の奈落を生き抜かれた人であった。師の法然とともに流罪となり、同門の安樂房ら四人が死罪となつてゐる。しかし、聖人はその孤独と苦難のときを耐え抜いて、日本の歴史に真実の世界思想、世界仏教を開示したのである。石川啄木の「ふるさとの山」への深い感謝は、いわば親鸞の孤独に堪え、世界を見つめている心に通底してゐると言える。真の孤独は、「自然法爾」に通底してゐるのである。

「五濁悪時群生海 応信如來如實言」のお言葉が、ここに改めて心底に響くのを感じる。万人に母親があると同じく、人間にはその心底にふるさとの山に合掌する心が備わっているのである。五濁の闇の深い今日、いよいよ深く眞実の智慧への合掌を深めたいと願わないではおれない。

高 史明(こさみよん)先生

1932年生まれ。作家、評論家。
山口県生まれ。本名・金天三。
3歳にして母と死別し、石炭仲士であった父に育てられる。高等小学校中退後、職を転々としつつ政治活動などを行う。1971年、初の著作を上梓、評論家となり、1975年、『生きることの意味』で日本児童文学者協会賞を受賞するが、同年、一人息子の岡真史が12歳で自殺。その遺稿詩集『ぼくは12歳』を妻の岡百合子との編纂で刊行する。その後、『歎異抄』を通して親鸞の教えに帰依し、著作のほか、各地で講話活動を行う。
著書『世の中安穏なれ』『悲の海は深く』『念佛往生に導かれて』等多数



*1石川啄木・いしかわたくばく(1886-1912)
岩手県玉山村生まれ。1902年盛岡中学を自主退学して上京、与謝野鉄幹・晶子夫妻を訪ねる。病気で帰郷の後、1905年詩集『あこがれ』刊行。故郷での代用教員、北海道での新聞記者生活などを経て、1910年『一握の砂』出版。1912年肺結核のため東京で死去。第二歌集『悲しき玩具』は死後出版された。

*2大逆事件・たいぎやくじけん(1910-1911)
幸徳秋水ら無政府主義者・社会主義者が逮捕・処刑された事件。1910年、明治天皇暗殺を計画した容疑で26名を起訴、うち24名が死刑判決を受け、1911年、幸徳秋水・菅野スガ・宮下太吉ら12名が処刑された。以後、社会主義は衰退して「冬の時代」となった。

*3韓国併合
1910年日本が韓国を領有したこと。日本は1904年第一次日韓協約で韓国に財政・外交顧問を設置、1905年第二次日韓協約で保護国化し、漢城(現ソウル)に統監府を設置、1907年第三次日韓協約で内政権を奪い、軍隊を解散、1909年伊藤博文暗殺事件などを契機に1910年韓国併合条約を調印、韓国を廃して日本領朝鮮とし、漢城を京城と改め朝鮮総督府を設置、1945年まで植民地として支配した。



本願寺東西分立と 岐阜本願寺門徒の東西分属

美濃門徒の起源をたどると、親鸞聖人が関東から京都に戻られる途中に教化を受けた葉栗郡門間の庄の九人（河野九門徒）が木瀬に草庵を結び、聖人を迎えて他力易行の法門に帰依したことに始まる。

また、本願寺第八世蓮如上人が関東巡化の途次、美濃尾張にある親鸞聖人の旧跡を訪ねられた折に草庵の復興を願われ、再興された。とりわけ当時美濃飛騨全地区にわたり宗風興隆となり天台・真言の諸寺が蓮如上人に帰依し改宗され、多くの門徒道場が相次いで創建された。創建・改宗は飛騨美濃で三百ヶ寺に及んだといわれている。

その後、本願寺の東（東本願寺第十二世教如上人）西（西本願寺第十二世准如上人）分立に伴い、当地域の本願寺寺院がどうのような事情で東西本願寺に分属していったのかをたずねてみたいと思う。



教如上人絵像

1 石山合戦終結と 教如上人の流浪

織田信長が難題を押し付けそれに抗戦する様相で始まった大坂本願寺合戦（石山合戦）は元亀元年（1570）より天正八年（1580）まで十一年間続いた、本願寺門徒衆と信長との対決をいう。天正八年、本願寺教如は父顯如から義絶されながらも籠城し続けた。この際、教如は郡上安養寺に書状を送り粉骨の尽力を要請している。天正八年四月九日、顯如は本願寺の寺基を紀州の鷺森に移す。しかし、籠城も厳しい状態となり、天正八年八月二日、教如はやむなく大坂を退去した。大坂退去後、教如は紀州雜賀に赴きしばらく形成を観望していた。

その後、甲斐の武田勝頼を頼りに身を寄せようとして試みるが、実際は、大和（奈良県）から越前（福井県）大野、そして九頭竜川上流より美濃（岐阜県）白鳥、郡上八幡の方向に向かったようである。近年の研究では、美濃の郡上八幡を中心とし、北陸越中（富山）城端方面や尾張・三河（愛知）の北部、山岳地帯なども潜伏地として考えられている。これらの地域には教如をかくまつたという伝承が残っていることや信長軍との徹底抗戦を支援する門徒衆がいたこと、さらには約一年間の流浪期に教如が下付した歴代絵像・絵伝等が現存することが、近年の調査で判明した。

『仏典童話』を訪ねて—

『仏典童話Ⅰ』 第10話「捧げ物」
(東本願寺発行)

ある日、おしゃかさまがおとものアーナンダと托鉢に出かけました。たまたま貧しい老人がおしゃかさまに出会いました。「なんとよいお顔をしていらっしゃるのだろう。」老人はおしゃかさまをじっと見つめると心が急にパッと明るくなりました。それは稻妻が光ったようでした。老人は家に戻り食べ物をもってきました。**とても粗末なものでした**が、それを捧げる老人は、おしゃかさまは口元を少しほころばせました。そんなときは決まってなにか特別な意味がありました。「なにかばららしいことがあるのですね」とアーナンダが尋ねると、おしゃかさまは「あの老人は布施のほんとうの意味がわかつた。いつか必ずさとりに至るだろう」とおっしゃいました。

それを見ていたある人が「みつともないね。あんな粗末なものに感激するなんて。おまけにあつぱつちの施してじいさんがさとりを開くなんて。うそもほどほどにしてくれないか。」そんなにおしゃかさまはおっしゃいました。「あの老人の布施はけしの種ほどかもしれないけれど澄みきつたまごとの心で捧げました。ほんの小さな種が巨大な二グローダの木になることを知っていますか。まして、人の心のまごとが種となつてどんなに大きな幸福が訪れても不思議はないでしょう。」おしゃかさまは自分を笑つた人たちに眞実とは何か、人はどう生きるべきかをわかりやすく話されました。翌日その人はたくさんの方たちを連れておしゃかさまの話を聴きに行きました。

怒った顔、笑った顔、悲しい顔、顔、顔…、私たちはいろんな顔をして毎日を暮らしています。そんな中で眞美に出会った喜びを満面にたたえた顔、そんな顔もあるでしょう。でも、普段雑事に追われ、好きか嫌いか、損か得かの価値判断で生きている私たちはなかなか年に一度の経済危機に直面してもがき苦しんでいる顔、あるいは生きることにも絶望したかのような生氣のない無気力な顔が、私たちの目の前の鏡に映し出されることは容易に想像ができるでしょう。

『大無量寿經』に、釈尊が眞実のさとりにいたつたとき、お顔が気高く清らかにひかりかがやいていた（光顔巍巍）ので、弟子の阿難が、「どうなさったのですか。」と聞くと「よ

く気づいて問うた」と阿難が褒められる、という場面があります。

この文言に出会われた親鸞聖人は、淨土和讃にも「大寂定にりたまい如來の光顔たえにして 阿難の慧見をみそなわし問斯慧義とほめたもう」と謳つておいでです。親鸞聖人は自らが出合われた「ひかり」と釈尊のこの「ひかりかがやく顔」とが重なり合う中で、宗教的感動と確信を持つて「大無量寿經」が「眞実の教」であると断定なさつたのでしよう。

私たち日本人は、戦後高度経済成長を遂げ、他国を、環境を犠牲にして物と金を絶対神として突き進んできました。今、この濁りに満ちた現代という時代の中で、私たちがいつたい何を信じ、どう生きればよいのかがアラため問われています。正に、親鸞聖人が正信偈に記された「如來所以興出世 唯說弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如來如實言」の四句が思い起されます。人間としてのほんとうの生き方に、ほんとうの「宗なる教え（道）」に出会つた喜びを満面にたたえた顔が私たちの目の前の鏡に映し出されることが強く願われているのです。

”光顔巍巍“

それ、眞実の教を頭さば、すなわち『大無量寿經』これなり。教行信証教卷より

あらすじの一部

ある日、おしゃかさまがおとものアーナンダと托鉢に出かけました。たまたま貧しい老人がおしゃかさまに出会いました。「なんとよいお顔をしていらっしゃるのだろう。」老人はおしゃかさまをじっと見つめると心が急にパッと明るくなりました。それは稻妻が光ったようでした。老人は家に戻り食べ物をもってきました。**とても粗末なものでした**が、それを捧げる老人は、おしゃかさまは口元を少しほころばせました。そんなときは決まってなにか特別な意味がありました。「なにかばららしいことがあるのですね」とアーナンダが尋ねると、おしゃかさまは「あの老人は布施のほんとうの意味がわかつた。いつか必ずさとりに至るだろう」とおっしゃいました。

それを見ていたある人が「みつともないね。あんな粗末なものに感激するなんて。おまけにあつぱつちの施してじいさんがさとりを開くなんて。うそもほどほどにしてくれないか。」そんなにおしゃかさまはおっしゃいました。「あの老人の布施はけしの種ほどかもしれないけれど澄みきつたまごとの心で捧げました。ほんの小さな種が巨大な二グローダの木になることを知っていますか。まして、人の心のまごとが種となつてどんなに大きな幸福が訪れても不思議はないでしょう。」おしゃかさまは自分を笑つた人たちに眞実とは何か、人はどう生きるべきかをわかりやすく話されました。翌日その人はたくさんの方たちを連れておしゃかさまの話を聴きに行きました。

怒った顔、笑った顔、悲しい顔、顔、顔…、私たちはいろんな顔をして毎日を暮らしています。そんな中で眞美に出会った喜びを満面にたたえた顔、そんな顔もあるでしょう。でも、普段雑事に追われ、好きか嫌いか、損か得かの価値判断で生きている私たちはなかなか年に一度の経済危機に直面してもがき苦しんでいる顔、あるいは生きることにも絶望したかのような生氣のない無気力な顔が、私たちの目の前の鏡に映し出されることは容易に想像ができるでしょう。

私たち日本人は、戦後高度経済成長を遂げ、他国を、環境を犠牲にして物と金を絶対神として突き進んできました。今、この濁りに満ちた現代という時代の中で、私たちがいつたい何を信じ、どう生きればよいのかがアラため問われています。正に、親鸞聖人が正信偈に記された「如來所以興出世 唯說弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如來如實言」の四句が思い起されます。人間としてのほんとうの生き方に、ほんとうの「宗なる教え（道）」に出会つた喜びを満面にたたえた顔が私たちの目の前の鏡に映し出されが、「どうなさったのですか。」と聞くと「よ

近世美濃国の宗派(東西) 別及び郡別寺院数

郡	派	本派	東派
厚見郡		34	37
各務郡		10	14
葉栗郡		4	38
中島郡			36
海西郡			27
石津郡		1	65
多芸郡		1	59
不破郡		4	72
安八郡		14	164
池田郡		7	28
大野郡		42	22
本巣郡		30	11
席田郡		4	
方県郡		37	1
山県郡		10	
武儀郡		11	5
郡上郡		25	59
加茂郡		9	7
可児郡		1	3
土岐郡			1
恵那郡		1	3
計		245	652

明治五年調
「各宗本末一派寺院細明帳」上

現在の岐阜県美濃地方の宗派(東西)別及び 市町村別寺院数(2008年現在)					
市町村	派	本派 東派	市町村	派	本派 東派
岐 阜 市		86 42	関 市		7 4
羽 島 市		1 55	美 濃 市		1 1
各 務 原 市		10 16	美濃加茂市		5 2
山 縣 市		8	可 児 市		1 2
瑞 穂 市		14 18	郡 上 市		24 57
本 巢 市		29 2	坂 祝 町		1
岐 南 町		2 5	富 加 町		2
笠 松 町			川 辺 町		1 2
北 方 町		2 1	七 宗 町		
大 垣 市		12 143	八 百 津 町		3
海 津 市			白 川 町		
養 老 町		1 61	御 嵩 町		1
垂 井 町		3 23	東 白 川 村		
閔 ケ 原 町		1 11	多 治 見 市		2
神 戸 町		5 12	中 津 川 市		2
輪 之 内 町		1 30	瑞 浪 市		
安 八 町		1 15	惠 那 市		1 4
揖 斧 川 町		15 32	土 岐 市		2
大 野 町		17 3	計		255 660
池 田 町		5 13			

いく話である。郡上安養寺が末寺二十余ヶ寺を率いて教如方にいたとの記録がある。

それは寺院のそれぞれの都合や内部事情によって所属が決定される場合と幕藩政治権力のあり方に規定される場合が想定される。特に、石山合戦以降、顕如、教如父子の行動との関わりが分属の重要な条件になることは勿論である。前述の濃尾門徒と教如の深い関係を鑑みると私たちの地域の多くが教如教団（東本願寺）に属したことは納得が

は門末獲得抗争があつたことは事実であり、人気のあつた教奴を本願寺の机へと奪おうとしたのである。このことは、本願寺の機関紙である『本願寺報』に記載されている。

天正二十年顕如が示寂し教如が一旦本願寺第十二世を繼職するが、母親如春尼から秀吉に顕如の「留守職讓状」があると訴えられる。これにより秀吉は教如を隠退させ末子の准如を本願寺第十二世留守職に任ずる。石田三成を中心とするグループが、千利休とも昵懇じっこんで、當時新門跡としてたいへん人気のあつた教如を、本願寺内の兼々な事情

本願寺は紀州鷺森から和泉貝塚の願泉寺に
寺基を移す。そのわずか二年後、さらに大坂
の天満に移転するも、天正十八年（1590）、
秀吉の京都市街地整備計画の一環として天
満から京都の堀川沿いに本願寺がさらに移
転する（現在の西本願寺）。

2 教如上人の本願寺退隱と 美濃門徒



安養寺(教如が身を寄せ、北美濃教化の拠点となった寺院)

3 東西本願寺分立と
美濃門徒の分属

そこには顯如でなく教如を慕い、支える支援者・門徒衆がいたということである。しかも下付されたものの中には「本願寺釈教如」「大谷本願寺釈教如」と署名証判されているものが多く、義絶・流浪の身でありながら門主の職務を教如が行っていたことを意味し、「教如教団」の萌芽期であつたとも考えられる。

2 石山合戦終結後、天正十一年（1583） 本願寺は紀州鷺森から和泉貝塚の願泉寺に 美濃門徒

その後、教如は慶長五年（1600）、関ヶ原の合戦直前に家康の陣中見舞いに関東に下向し、家康に接近していく。同年八月、関東よりの帰途、羽栗郡足近村の西方寺に入り、その後足近を出発した折に、墨俣渡船場付近に石田三成方の伏兵が待機していたので、難を避けて安八郡森部村の光顯寺にかくまわれた。ついで小野村専勝寺に入り住持の案内で春日谷に赴いたという。

また、不破郡草道島村西円寺へ立ち寄ったともいう。とりわけ、三成の軍勢に追われ光顯寺に逃げ込んだ折にはもはやこれまでと

教如が辞世の歌を残したほどであるか、周辺の僧侶・農民ら教如支持者（土手組）の命をかけたお守りにより難を逃れる。西円寺においては住持佐々木賢秀が自ら教如の身代わりになり殉死されたことも特筆しておきたい。教如が石山合戦以降、三成の執拗な攻撃を逃れ、京都に戻り家康の力を借りて本願寺の別立を成すまでに、いかに私たちの美濃国と深い関係があつたかを思い知らされる。

本願寺独立の意志を堅持し、身の危険を顧みず聖人一流の教えを後の世に伝えようとする教如の本願寺門跡としての自覚と責任が伺えることである。

合戦時、郡内寺院が家康軍に加担したことによるとの記録も残る。また、当時、慶長・元和期の美濃の領主で、羽栗・各務・中島・安八の四郡二十六ヶ村の領主であつた稻葉正成を頼み教如が教勢拡大に努めたとの書簡も残る。いざれにせよ、たいへんな勢いで尾張地域から北美濃地域に至るまで教如教団の教勢は拡大し、既存の寺院が東派に帰属し、また

また、不破郡にも東派が多いのは関ヶ原の

その後、教如は慶長五年（1600）、関ヶ原の合戦直前に家康の陣中見舞いに関東に下向し家康に接近していく。同年八月関東よりの帰途、羽栗郡足近村の西方寺に入り、その後足近を出発した折に、墨俣渡船場付近に石田三成方の伏兵が待機していたので、難を避けて安八郡森部村の光顯寺にかくまわれた。ついで小野村専勝寺に入り住持の案内で春日谷に赴いたという。

また、不破郡草道島村西円寺へ立ち寄った

院は本派に属する寺院が多いのはこのためである。(現在の岐阜市内の本願寺寺院数は、およそ本派二に対して東派一の割合で本派寺院が多い。)

慶長年中、各務郡新加納村の旗本坪内（つぼうち）玄蕃は、教如に帰依し堂宇を創建した。

ついで元和八年（1622）、宣如は寺地を厚見郡小熊村（岐阜市大門町）に移転し

就は任意とされたが、東西両本願寺の間に

ことを関ヶ原の合戦の覇者でもある家康が追認し、寺地を寄進し現在の京都烏丸の地に東本願寺が造営される。慶長九年（1604）、堂宇が整い、上野廻橋（群馬県前橋）の妙安寺に伝来する親鸞聖人御真影を移し遷座法要が営まれ、ここに本願寺の東西分派が成ったのである。

教如が辞世の歌を残したはどこであるか周辺の僧侶・農民ら教如支持者（土手組）の命をかけたお守りにより難を逃れる。西円寺においては住持佐々木賢秀が自ら教如の身代わりになり殉死されたことも特筆しておきたい。教如が石山合戦以降、三成の執拗な攻撃を逃れ、京都に戻り家康の力を借りて本願寺の別立を成すまでに、いかに私たちの美濃国と深い関係があつたかを思い知らされる。本願寺独立の意志を堅持し、身の危険を顧みず聖人一流の教えを後の世に伝えようとする教如の本願寺門跡としての自覚と責任が伺えることである。

◎参考資料
 一、岐阜県史近世・下
 二、岐阜県真宗史
 三、教如流転

一、岐阜県史 近世・下
二、岐阜県真宗史
三、教如流転
四、教如上人と東本願

編集 岐阜県
林周教著
宮部一三著
編集教學研究所